名簿No. 1

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

（七言絶句）

詩題	起句		承句		転句		結句	
新秋夜坐	草	●	月	●	獨	●	須	○
	閒	○	下	●	對	●	臾	○
	蟲	○	晚	●	銀	○	心	○
	語	●	涼	○	輪	○	跡	●
	報	●	清	○	消	○	任	●
尤韻	新	○	夜	●	俗	●	虛	○
	秋	◎	流	◎	慮	●	舟	◎

平仄式	作詩日
平起式	令和三年七月七日

名前：牛山 知彦

読み下し文

新秋夜坐

草間の虫語　新秋を報じ
月下の晩涼　清夜流る
独り銀輪に対せば　俗慮消え
須臾にして　心跡　虛舟に任す

語註・典故・作詩メモ

・銀輪＝月の別称。
・須臾＝しばらく。少しの間。
・心跡＝心と振る舞い。
・虛舟＝虛心のたとえ。

その他のメモ

名簿No. 2

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

（七言絶句）

詩題	起句	承句	転句	結句
新秋夜坐	雨●	藝○	熒○	獨●
	洗●	窓○	然○	坐●
	殘○	風●	燈○	茅○
	炎○	伴●	火●	堂○
	天○	候●	縦●	秋○
庚韻	地●	蟲○	書○	月●
	清◎	聲◎	巻●	明◎

平仄式	平起式
作詩日	令和三年七月八日
名前	宇野次郎

読み下し文
新秋夜坐
雨残炎を洗い　天地清し
芸窓の風に伴い　候虫の声す
熒然たる灯火のもと書巻を縦にす
茅堂に独坐す　秋月明なり

語註・典故・作詩メモ
課題詩

その他のメモ

名簿No. 5

神漢連　九詩期会　詩箋　【七言絶句】

詩題	起句	承句	転句	結句
新秋夜坐	月 ●	憶 ●	窓 ○	惹 ●
	冷 ●	郷 ○	前 ○	起 ●
	風 ○	起 ●	咫 ●	蕭 ○
	清 ○	坐 ●	尺 ●	然 ○
	秋 ○	夜 ●	一 ●	遊 ○
庚韻	意 ●	三 ○	蟲 ○	子 ●
	生	更 ◎	語 ●	情

語註・典故・作詩メモ

読み下し文
新秋夜坐
月冷やかに　風清く　秋意生じ
郷を憶い　起座す　夜三更
窓前　咫尺　一蟲語り
惹起す　蕭然　遊子の情

作詩日　令三・七提出

名前　岡嶋宣昭

その他のメモ

名簿No. 4

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

（七言絶句）

平仄式	平起式
作詩日	令和三年七月
名前	髙橋 幸雄

詩題	起句	承句	転句	結句
新秋夜座	天○	落○	蟬○	月●
	高○	日●	喧●	明○
	嫋●	涼○	何○	夜●
	嫋●	風○	之○	坐●
	巻●	蟲○	無○	読●
尤韻	雲○	韻●	酷●	書○
	流◎	幽◎	暑●	秋◎

しんしゅうやざ

新秋夜座

てんたか　じょうじょう　けんうんなが

天高し　嫋嫋　巻雲流れ

らくじつりょうふう　ちゅういんかすか

落日涼風　虫韻幽なり

せんそう　いず　ゆ　こくしょな

蟬噪　何くに之かん　酷暑無く

げつめいやざ　どくしょ　あき

月明夜座　読書の秋

モメ 語註・典故・作詩メモ

日中、うろこ雲やトンボを目にし、蝉の鳴き声がとだえ夜には庭先の虫の音を聞く。夏の暑さが遠のき、すでに秋の始まりに気づく。食欲も戻り活動に満ちた秋を詠うつもりでしたが、ことばが見つかりません。

その他のメモ

名簿No. 5

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

（七言絶句）

詩題	起句	承句	転句	結句
郊居秋興	涼○	霽●	風●	庭○
	颼○	月●	趣●	前○
	蕭○	清○	獨●	邂●
	瑟●	澄○	酎○	逅●
	度●	照●	寛○	木●
青韻	郊○	小●	楽●	犀○
	坰◎	亭◎	譜●	馨◎

平仄式	作詩日
平起式	R3.7.6

名前：武田 一郎

読み下し文

郊居秋興（こうきょしゅうきょう）

涼颼蕭瑟（りょうひょうしょうしつ）と郊坰（こうけい）を度（わたる）

霽月清澄（せいげつせいちょう）に少亭（しょうてい）を照（て）らす

風趣（ふうしゅ）に獨酎（どくしん）し寛（くつろ）いで棋譜（きふ）を楽（たの）しむ

庭前（ていぜん）で邂逅（かいこう）す　木犀（もくせい）の馨（かおり）

語註・典故・作詩メモ

涼颼：秋風
蕭瑟：秋風が寂しくふくこと、またその様
郊坰：都をから遠く離れた地
霽月：晴れの月
酎：酒を酌む

その他のメモ

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

（七言絶句）

平仄式	仄起式
作詩日	令和三年六月七日
名前	平賀康雄

名簿No. 7

詩題	起句	承句	転句	結句
新秋夜坐	清○	籬○	只○	何○
	夜●	邊○	管○	等●
	雨●	蟋●	端○	不○
	過○	蟀●	坐●	求○
	吟○	作●	空○	任●
灰韻	興●	詩○	齋○	去●
	催◎	媒◎	裏●	来◎

読み下し文

新秋夜坐

清夜雨過ぎ吟興催す

籬辺の蟋蟀詩媒をなす

只管端坐す空齋の裏

何ら求めず去来に任す

語註・典故・作詩メモ

九月分

○蟋蟀・・こおろぎ　○詩媒・・作詩の材料、なかだちとなるもの　○去来・・様々な思いが浮かんだり消えたりする

その他のメモ

名簿No. 8

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

（七言絶句）

詩題	起句	承句	転句	結句
新秋夜坐	仰●	新○	窓○	万●
	見●	涼○	前○	里●
	風○	茅○	獨●	悲○
	檐○	屋●	坐●	秋○
	月●	夜●	親○	抱●
尤韻	一●	悠○	灯○	百●
	鉤◎	悠◎	火●	憂◎

語註・典故・作詩メモ

平仄式	作詩日
仄起式	令和三年六月二八日

名前：古川 彌

読み下し文

新秋に夜坐す

仰ぎ見る風檐に月一鉤
新涼の茅屋夜悠々たり
窓前に獨り坐して灯火に親しめば
万里の悲愁百憂を抱く

その他のメモ

名簿No. 10

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

（七言絶句）

詩題	起句	承句	転句	結句
新秋夜坐	西○	窗○	尚●	孤○
	風○	下●	有●	燈○
	颯●	啾○	玲○	滅●
	颯●	啾○	瓏○	燭●
	見●	候○	天○	坐●
庚韻	秋○	蟲●	半●	三○
	生◎	聲◎	月●	更◎

平仄式	平起式
作詩日	令和三年六月
名前	松本祐輔

読み下し文

新秋夜坐

西風颯々　秋の生ずるを見る
窓下は啾々　候虫の声
尚有り玲瓏たる　天半の月
孤灯燭を滅して　三更に坐す

語註・典故・作詩メモ

令和三年七月課題新秋夜坐
夜坐　眠らずに座る
颯颯　風のそよそよと吹く形容
啾啾　虫や鳥の小声でなくさま
玲瓏　明らかなるさま

その他のメモ

2018.03.10 第1.4版

名簿No. 11

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

（七言絶句）

詩題	起句	承句	転句	結句
新秋夜坐	独 ●	陰 ○	気 ●	素 ●
	坐 ●	中 ○	晴 ○	願 ●
	新 ○	疫 ●	把 ●	難 ○
	秋 ○	癘 ●	酒 ●	図 ○
	月 ●	更 ●	流 ○	又 ●
先韻	影 ●	曼 ○	歠 ○	一 ●
	鮮 ◎	延 ◎	怨 ●	年 ◎

眠

新秋夜坐

新秋独坐す月影鮮なり
陰中の疫癘更に蔓延す
気を晴らさんと酒を把って怨みを流歠す
素雁図り難く又一年

平仄式	仄起式
作詩日	令和三年七月七日
名前	三浦 昭二

語註・典故・作詩メモ

陰中（いんちゅう）ひそかに人を陥れ危害を加える
流歠（りゅうせつ）一気に飲み干す

その他のメモ

名簿No. 12

神漢連　九詩期会　詩箋【七言絶句】

詩題	起句	承句	転句	結句
新秋夜坐	迎○	拝●	抛●	今○
	朋○	仏●	入●	宵○
	一●	詩○	萩○	回●
	夜●	論○	花○	復●
	訪●	意●	秋○	旧●
（陽韻）	僧○	気●	色●	交○
	房◎	揚◎	好●	場◎

語註・典故・作詩メモ

その他のメモ

読み下し文

新秋夜坐

朋を迎え　一夜僧房を訪れる
仏を拝し詩を論じ　意気揚がる
抛入の萩花　秋色好し
今宵は　旧交回復の場となる

作詩日　令和　三年七月七日

名前　森谷正彦

名簿No. 13

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

（七言絶句）

詩題	起句	承句	転句	結句
新秋夜坐	残○	蟋●　蟀●	静●	周○
	炎○	涼○	坐●	秦○
	漸○	聲○	書○	簡●
	去●	意●	齋○	牘●
	暑●	自●	耽○	又●
魚韻	威○	如◎	夜●	延○
	疎◎		讀●	餘◎

新秋夜座

残炎漸く去り暑威疎らなり
蟋蟀涼声意　自如たり
書齋に静坐し夜読に耽る
周秦の簡牘また余を延く

平仄式	平起式
作詩日	令和3年七月
名前	諸星暢義

初稿

語註・典故・作詩メモ

意自如――――心落ち着くさま（だれ漢より）
簡牘――文字を書いた、木簡、竹簡を指す
又～を延く――――導く、引き寄せる。招く（だれ漢より）
余――自分――史記、伯夷伝で使用

その他のメモ

2018.03.10 第1.4版

名簿No. 14

神奈川県漢詩連盟九詩期会【詩箋】

（七言絶句）

平仄式	平起式
作詩日	7月8日
名前	山口 幸雄

詩題	起句	承句	転句	結句
新秋夜坐	新○	故●	夜●	旧○
支韻	秋○	友●	坐●	盟○
	冷●	凶○	三○	宿●
	氣●	音○	更○	志●
	露●	突●	蘇○	去●
	華○	如●	往●	何○
	滋◎	知◎	昔●	之◎

新秋夜坐（しんしゅうやざ）

新秋の冷気（しんしゅうれいき）　露華滋し（ろかしげし）

故友の凶音（こゆうきょういん）　突如知る（とつじょし）

夜坐三更（やざさんこう）　往昔を蘇らす（おうせきよみがえ）

旧盟・宿志（きゅうめい・しゅくし）　去って何れにか之く（さいずゆく）

モメ 作詩・故典・註語

○露華　露が光ること。また、露の光。
○凶音　死亡の知らせ。
○三更　五更の一つ。日没から夜明けまでの時間を五つにわけたその三番め。丙夜。夜中の十二時頃。
○旧盟　国どうしや、党派の間の昔の約束。ここでは友との約束。

その他のメモ

新秋になって冷気が庭に露を光らせている
思いがけず古い友人が亡くなったという知らせが入った。
夜遅く、じっとしていると、昔のあれこれが蘇ってくる。
昔の約束や希望など、みんなどこかへ行ってしまった。

・具体的なものが露華しかない。